

論文審査の結果の要旨

報告番号	甲医第 1551 号	氏名	長坂 信司
審査委員	主査 岩佐 武 副査 金山 博臣 副査 富田 江一		

題目 Radiographic Study Evaluating Perforator Vessels in the Ischiorectal Fossa for Safe Elevation of Island Flaps
 (島状皮弁を安全に挙上するための坐骨直腸窩内穿通枝に関する放射線学的評価)

著者 Shinji Nagasaka, Yoshiro Abe, Yutaro Yamashita, Hiroyuki Yamasaki, Kazuhide Mineda, Mitsuo Shimada, Ichiro Hashimoto
 令和4年10月発行 Plastic and Reconstructive Surgery - Global Open. 第10巻10号 e4561 に発表済
 (主任教授 橋本一郎)

要旨 皮膚軟部組織欠損創に対する再建手術では、信頼できる動静脈穿通枝を有し、血行が良好な皮弁を用いることが重要である。坐骨直腸窩を基部とする穿通枝皮弁は、血管茎が欠損部の近くに位置するため会陰部再建に有用とされる。しかし、坐骨直腸窩には直腸、膣、尿道などの臓器や厚い脂肪組織が含まれているため、深部の動静脈から皮膚に分布する穿通枝の3次元的な解剖学的特徴は不明である。申請者らは坐骨直腸窩内における皮膚穿通枝の詳細な解剖を明らかにすることを目的として、骨盤部造影 CT 検査を解析した。結果を以下に示す。

1. 内腸骨動脈から内陰部動脈と上・下臀動脈への分枝パターン

として3種類を認めた。内陰部動脈の欠損例はなく、パターンの割合は従来の実解剖によるものと一致した。

2. 坐骨直腸窩における皮膚穿通枝の分布パターンは、内陰部動脈のみに由来する皮膚穿通枝(78.5%)、内陰部動脈と下臀動脈の両方から由来する皮膚穿通枝(17.5%)、下臀動脈のみに由来する皮膚穿通枝(4.0%)の3グループに分けられた。下臀動脈由来の皮膚穿通枝を有する症例は全体の21.5%であり、坐骨直腸窩に内陰部動脈由来以外の皮膚穿通枝が存在した。

3. 坐骨直腸窩における皮膚穿通枝の平均数は1.7本(男性1.3本、女性2.0本)であり、皮膚穿通枝の数は、男性よりも女性で有意に多いこと、すべての症例で坐骨直腸窩に皮膚穿通枝を認めることを明らかにした。また、皮膚穿通枝が坐骨直腸窩へ出現する場所は、坐骨結節の内側から背側部位であった。

以上の結果より、坐骨直腸窩の皮膚穿通枝は安定して存在していること、解剖学的には坐骨結節内側から背側に皮膚穿通枝が存在することを明らかにした。また穿通枝数に性差があることや坐骨直腸窩に下臀動脈由来の穿通枝が存在することを初めて示した。これらの結果は坐骨直腸窩を基部とする穿通枝皮弁の安全な挙上法や手術適応の判断に重要な知見となるため、学位授与に値すると判定した。